

らせ給へと云ければ、更に牛など取よせておはしけるに、御ともには人侍らで有なん、時光一人とて、みのかさきてなん有ける、大極殿におはしたるに、猶おぼつかなく侍りとて、つぎまつ取てさらに火ともしてみければ、柱にみのきたる者の立添たる有けり、かれは誰ぞと問ければ、武能と名のりければ、さればとて其夜はおしへ申さで、歸りにけりと申人も有き、

〔今昔物語 十六〕丹後國成合觀音靈驗語第四

今昔丹後國ニ成合ト云フ山寺有リ、觀音ノ驗シ給フ所也、其ノ寺ヲ成合ト云故ヲ尋ヌレバ、昔シ佛道ヲ修行スル貧キ僧有テ、其寺ニ籠テ行ケル間ニ、其ノ寺高キ山ニシテ、其ノ國ノ中ニモ雪高ク降リ、風嶮ク吹ク、而シテ冬ニ間ニテ雪高ク降リテ人不通ズ、而ル間此ノ僧糧絶テ日來ヲ經ルニ、物ヲ不食ズシテ可死シ、雪高クシテ里ニ出テ乞食スルニモ不能ズ、亦草木ノ可食キモ无シ、暫クコソ念ジテモ居タレ、既ニ十日許ニモ成ヌレバ、力无クシテ可起上キ心地セズ、然レバ堂ノ辰巳ノ角ニ蓑ノ破タル敷テ臥タリ、略下

〔宇治拾遺物語 八〕是も今はむかし、下野武正といふ舍人は、法性寺殿○藤原忠通に候けり、あるおり大

風大雨ふりて、京中の家みなこぼれやぶれけるに、殿下近衛殿におはしましけるに、南面の方にのゝゑるもの、聲しけり、誰ならんとおぼしめて見せ給に、武正あかかうのかみしもに、蓑笠をきて、みの、うへに繩を帶にして、ひがさのうへを、又おとがひに繩にてからげつけて、かせ杖をつきて走まはりておこなふなりけり、大かたそのすがたおびたしく、しくなるべき物なし、殿南おもてへ出て、御簾より御覽するに、あさましくおぼしめて、御馬をなんたびける、

〔十訓抄 七〕粟田左大臣在衛は、○中略朝夕の恪勤餘人に勝たり、風雨おぼろげならぬ日ありけり、左

衛門陣の吉上云く、たとひ在衛なり共、今日は參がたしと、ことばいまだ不終に、ありひら蓑をき、深沓をはきて參られたりけり、時の人感じの、しりけり、○又見古事談、續古事談、